

# CAGLIERO

カリエロ11 サレジオ会  
宣教ニュース

N.141 - 2020年9月



サレジオ会宣教部門によるサレジオ会共同体・サレジオ・ミッションの友人のための通信

## ここに私がおります、私を遣わしてください!

宣教顧問 アルフレド・マラヴィジャ神父 SDB

これまで長年にわたり、毎年、9月の最後の日曜日に、ヴァルドッコの扶助者聖マリア大聖堂で、総長は宣教派遣式を執り行ってきました。コロナウィルス蔓延の中、今年の第151回宣教派遣は後日に延期されることになりました。

イエスは御父の宣教師です：御父に遣わされました；イエスの生き方と奉仕の働きは、進んで遣わされる意志、御父のみ旨への全面的な従順を明らかにします(ヨハネ4・34)。そしてイエスは、ご自分の使命に私たちをあずからせ、使命を帯びた私たちを全世界へと遣わされます。教会の使命は福音宣教することです。今日、教会は、福音宣教者をあらゆるところへ遣わし続けています(使徒的勧告「福音宣教 Evangelii Nuntiandi」15)。

私たちが信仰をあかしし、福音を宣べ伝えることによって、人々がイエスを知るように。実に、教会における宣教の召命は何よりも、主の問いへの絶えず新たにされる応答なのです。「誰を遣わそうか」という主の問いへの。これは、自分の殻から歩み出て、私たちの安全地帯を出て、自由に、目覚めた意識をもって応えるようにとの招きです。主が遣わすところどこへでも行く全面的な心の用意をもって：「ここに私がおります。私を遣わしてください!」(イザヤ6・8)と。

サレジオの宣教召命は、教会の宣教する本質にあずかることです(第二バチカン公会議文書「教会の宣教活動に関する教令」2)。すべてのサレジオ会員がドン・ボスコのカリスマの本質的な要素である宣教精神を生きるよう呼ばれている一方で、ad exteros(自らの国あるいは文化を出て外へ)、ad vitam(生涯をかけて)の宣教師の道に呼ばれるサレジオ会員がいます。サレジオの宣教召命は、私たちが共有するサレジオの召命の中の、さらなる召し出しです。そのため、霊的指導者の助けを得ながら、祈りと識別が必要です。1875年以来、遣わされていったサレジオ会宣教師のおかげで、ドン・ボスコのカリスマは今、134か国に存在しています。主の呼びかけが確かになったならば、総長に直接手紙を書き、どこへでも遣わされる用意があることを知らせることができます。

主はあなたを、宣教師となるよう呼んでおられますか?

振り返りのために

- 神は宣教師となるよう私を呼んでおられるだろうか?
- 今日、ドン・ボスコの宣教精神をどのように生きることができるだろうか?



1875年以来、毎年、宣教地へ赴く宣教師たちは、とても意味深い十字架を受け取ります。その十字架の一つひとつの要素は、サレジオの宣教の霊性の豊かさを表しています。

### 十字架

最初の力強いシンボルは十字架そのものです。十字架を受けることは、多くの思いを湧き上がらせ、また霊的挑戦が伴います。十字架を受けることによって、宣教生活はキリストという方、十字架につけられたキリストを中心とするものになります。それは、十字架の大いなる教えをまず受け、そして、さしだすことを意味します：ご自身の最良のもの、御子をさしだされる、御父の限りない愛；人類の救いのため、御父のみ旨に自らを明け渡された、従順、寛大な御子の、最後まで愛し抜かれる愛、という教えです。

### 宣教と十字架

宣教を表す伝統的な図像では、人々に十字架を示す宣教師がしばしば描かれます。この表現は、ある人々にとっては植民主義的とまで言わなくとも、少々単純に思われるものですが、私たちサレジオ会員にとっては「最高の知識はイエス・キリストを知ること、最大の喜びは、キリストの神秘の測り知れない富をすべての人に示すことである」(サレジオ会 会憲第34条)ことを意味します。

### 善き牧者

十字架は、サレジオ会のカリスマにおいては、限りない司牧的献身のうちに生きられるものです。善き牧者はサレジオのキリスト論を示します：サレジオ会精神の中心である牧者の愛、「柔和と献身によって心をつかえようとする」姿勢のうちに(サレジオ会 会憲第10-11条)。

# 意味のある人生のために宣教師となって



アユボワン!(ご長寿を!)

私は実地課程を宣教師としてパプアニューギニアで過ごしました。1996年に神学課程のためフィリピンに戻りました。それ以来、宣教地に戻りたいという思いはくすぶる火種のように燃え続けていました。私はすでに志願生のときから、宣教地へ行くことをいつも夢見ていました。この熱い望みに再びのチャンスを与えて明るい炎へと燃え立たせるまで、かなり時間がかかりました。待つ価値はあったと感じています。

とうとう2015年10月11日、誓願25周年、司祭として15年、地上に存在するようになって45年目に、私は宣教師としての生活という深い海に飛び込む勇気を再び奮い立たせました。

私は小さな島国へと飛び立ちました。「インドの涙」と呼ばれる、スリランカです。仏教とヒンズー教の影響を大きく受けた、初めて経験する文化の挑戦に立ち向かいました。

ほとんどが味蕾に焼けるように感じる「悪魔のような激辛スパイシー」な食べ物に適応し；土地の人々と意思疎通をするのに欠かせない、舌を噛みそうなシンハリ語とタミール語を覚え、人材面、創意豊かで持続可能な使徒職、そのほか切りがないほどの要求に関わる準管区の高まるニーズに応えるという挑戦です。今も宣教師になろうと努力している私のような者にとっては、すべてにおいて多くの忍耐、愛、謙遜が必要です。

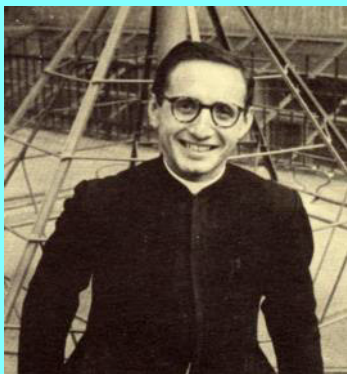
「**行うこと**」よりも、「**在ること**」が求められます。なぜなら宣教地で私は再び、すべてを初めて学ぶ小さな子どものようにならなければならなかったからです。また宣教地で、「**愛LOVE**」は「**差し出すGIVE**」とつづると知りました。その時々自分に求められることに応えるため、私のそれまでの人生、今の望み、将来の計画を差し出し、**手放す giving up** ことだと。

この生活は、要求されることばかりではありません。思いがけない、真のなぐさめの源泉もあります。ある日、私は指導していた黙想会で、地元出身のサレジオ会神学生に10年後の自分を想像してみるように言いました。彼は答えました：「神父様、サレジオ会司祭になっている自分が見えます……」。そして私が口をはさむ間もなく続けました。「……でもただ司祭というだけでなく、宣教師司祭になり、遠い地へ行くために自分をささげたいです……**意味のある人生を生きたいから**。」これを聞いて私はうれしくなり、心の中で思いました。「……やっぱり、目に見えるすべてを超えた、それ以上のものが本当にあるんだ……」

宣教師になることを夢見ている人に、私はこのように言いたいです：**宣教地にいれば自動的に宣教師になるわけではない。宣教師になることはプロセスで、時間をかけた歩み。宣教師になろうと頑張っている者の言葉として受けとめてほしい、と。**

ジェズ、ピタイ!(イエスの祝福がありますように!)

フィリピン出身、スリランカの宣教師 ノエル・スマギ



尊者ジュゼッペ・クアドリオ神父

(1921 - 1963)、トリノ - クロチェッタの神学教授。ジェネララの少年刑務所

の少年たちをしばしば訪ねた。あるとき、次のように少年たちに書き送っている：「冬が過ぎれば春が訪れます。鉄格子の中にいる君たち、悲しんだり絶望したりしないように！希望は誰にもあります。私たちは皆、過ちをおかすけれど、過ちをおかしたなら償うことができます。更生した者は、恥じることなく、顔を上げてまっすぐ人の目を見ることが出来ます。再出発したいと願う若者にとって、遅すぎるということは決してないのです。忘れないでください、君たちは廃材ではなく、救い出された資材です。友である皆さん、自分自身に、そして神に信頼を置いてください。神は君たちの回復を望んでおられる、君たちを正直で幸せな人間にしたいと望んでおられるのです。君たちは若い。君たちにはまだ明日がある、晴れやかな、すばらしい明日が。希望と善意は、最後まで失ってはいけません。」

## サレジオの宣教の聖性のあかし

サレジオ会列聖申請人 ビエルルイジ・カメローニ神父

## 私たちが共に暮らす家のために



## サレジオ会の宣教の意向

地球の資源が、略奪されるのではなく、公正に、大切に分かち合われますように

サレジオ会はラウダート・シに一致して、「エネルギー、いつまでも」という題で会議を開催しました。会議は、再生可能エネルギーの使用へと早急に前進するよう提言しました。サレジオ家族が、具体的で迅速な行動によって、共に暮らす家への奉仕に積極的にたずさわりますように、祈りましょう。

